

てえへんだ！ 幕末江戸の事件簿 展示資料解説

令和3年11月1日（月）～11月30日（火）

★→重要文化財 文末（）→大きさ

第1章 江戸の大事件

嘉永6年(1853)6月にアメリカ合衆国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが、軍艦4隻で浦賀沖に来航しました。その15年後の慶応4年(1868)9月には、もう時代は「明治」に突入します。この激動の15年間に将軍のお膝元の江戸では様々な大事件が起きました。

第1章では、15年間の主な事件として海防のための「御台場造営」、幕府の弱体化が明らかとなった「桜田門外の変」、アメリカ公使館の通訳「ヒュースケン暗殺」、幕府の終焉「江戸城開城」、江戸が戦場となった「上野戦争」、東京への遷都「東京への^{きょうこう}行幸」の6件を取り上げます。

1 ペリー来航から御台場造営

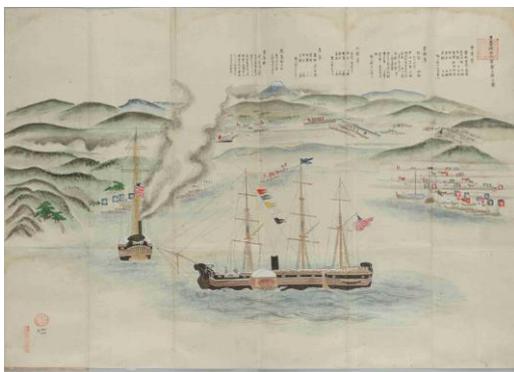
アメリカ合衆国の東インド艦隊司令長官ペリーは、大統領の国書の受け取りと開国を求めて、嘉永6年(1853)6月に浦賀沖に来航しましたが、幕府から回答の猶予を求められ一時、退去しました。翌嘉永7年(1854)正月、軍艦7隻で再来航したペリーに対し、3月には幕府は日米和親条約を締結します。

江戸湾の防備は文化7年(1810)頃から始められていましたが、嘉永6年(1853)のペリー来航の直後から海防強化のために品川沖に御台場(砲台)が造営されました。^{いずいらやま}伊豆葦山代官^{えがわたろうざえもん}江川太郎左衛門の献策で11基造営の予定でしたが、ペリーの再来航には1基も間に合いませんでした。嘉永7年(1854)7月に第一～三番が竣工しましたが、資金難で計画が変更され、完成したのは先の3基に加えて、第五・六番台場と御殿山下台場(後に第四番台場に改名)の6基のみでした。

●御台場造営

1 ^{あめりかじんくりはまじょうりくのず} 亜墨利加人栗浜上陸之図 写 1枚

近藤記念海事財団文庫 79-1

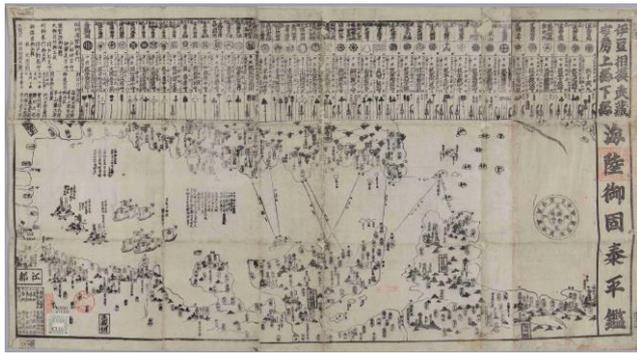


嘉永6年(1853)6月、アメリカ合衆国のインド艦隊司令長官マシュー・ペリーは日本の開国を求めて、軍艦4隻を率いて浦賀に来航しました。幕府は浦賀の隣村の久里浜の応接所で国書を受領しました。その時の上陸の様子を描いた図です。

蒸気船からさかんに蒸気が上がる様子や警備にあたる会津藩や忍藩などの旗印が描かれています。図の上部には蒸気船の大きさと警備の概要も記載されています。(78.5×111.3cm)

2 伊豆相模武蔵安房上総下総海陸御固泰平鑑 [安政]刊 1枚

近藤記念海事財団文庫 328



ペリーの浦賀来航直後から、幕府は江戸湾防備の強化に着手します。沿岸の防備は文化7年(1810)頃から始められ、弘化4年(1847)には川越・忍・彦根・会津の四藩に相模海岸・房総海岸の警護を行わせる体制ができていましたが、さらに多くの藩を地域ごとに割り当て、警護に当たらせました。「御固」は警護のことです。この摺り物は、御固の状況を、上部に各藩の家名・家紋・石高などの一覧、下部に配置図で示したものです。湾防備の情報は、瓦版として江戸市中に伝えられました。(47×86cm)

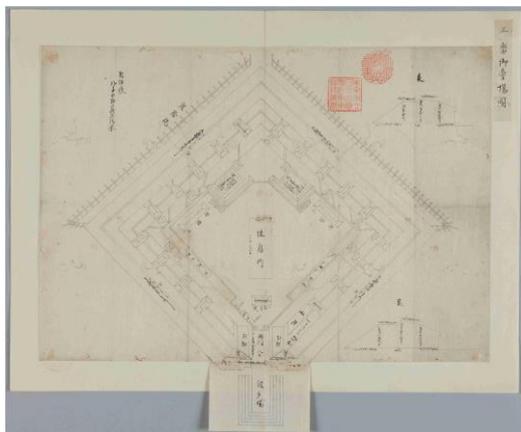
3 内海御台場築立御普請御用中日記 高松彦三郎[著] 嘉永6~7年 写 3冊

東京誌料 6929-2

品川御台場は、伊豆韮山代官江川太郎左衛門立案による品川沖に11基の台場を造営する計画に基づき築造されました。これは、御台場築造現場の責任者の一人となった幕府小人目付高松彦三郎の日記です。日記には「内海御台場御普請御用掛」が発足する前日の嘉永6年(1853)8月27日から、後れて起工された第五、第六、御殿山下の3基が警備を担当する藩に引き渡される嘉永7年(1854)12月22日までのできごとが記されています。(24×17cm)

4 江戸品川御台場仕様図面 [4] 三番御台場圖 写 1枚

東京誌料 0511-30-4



三番御台場は、約8,500坪の敷地に、火薬庫や玉置所、番士休息所、防御のための一文字堤や持留土が配置されていました。周囲には波の浸食を防ぐとともに敵船の接岸を妨げる波除杭が設けられました。嘉永6年(1853)8月に起工され翌年7月に竣工、大砲の据え付けなどを行った後11月に警備を担当する忍藩に引き渡されました。(34.5×40cm)

5 名所江戸百景 高輪うしまち

歌川広重(1世)画 魚屋栄吉 安政4年(1857)刊 錦絵1枚

東京誌料 0431-C7



「高輪うしまち」は東海道の高輪大木戸(御府内と御府外の境)の西、泉岳寺近くにありました。寛永11年(1634)の増上寺安国殿建立の際、京都から呼び寄せられた牛車を扱う運搬業者が幕府から土地を賜って定住し、通称「牛町」と呼ばれるようになったのです。この絵はうしまちの海岸沿いから江戸湾を眺めた情景です。遠くに見える岩場は、嘉永6年(1853)のペリー来航後から翌年にかけて江戸の防衛のために築造された「御台場」です。(35.2×23.6cm)

2 桜田門外の変からヒュースケン暗殺

安政 7 年(1860)3 月、江戸城桜田門外で大老井伊直弼が水戸・薩摩の浪士に殺害される「桜田門外の変」が起きました。勅許を受けずに日米修好通商条約に調印したことや安政の大獄で尊王攘夷派の人々への弾圧を行ったことが原因とされています。白昼に大老が暗殺されたことで、幕府の権威は失墜し、その後の政情に大きな影響を及ぼしました。

また、万延元年(1860)12 月には、アメリカ公使タウンゼント・ハリスの通訳ヘンリー・ヒュースケンが攘夷派の浪士たちに暗殺されます。麻布の善福寺(アメリカ公使館)への帰宅途中を襲われ、麻布の光林寺に葬られました。前年の安政 6 年(1859)の横浜開港後、攘夷派による外国人暗殺が次々と起き、ハリスもヒュースケンに警告していた中で起きた出来事でした。

●桜田門外の変

6 増補改正 廻町永田町外桜田絵図

景山致恭図 [金鱗堂]尾張屋清七 嘉永 3(1850)/万延元(1860)改正 1 枚

東京誌料 0411-30



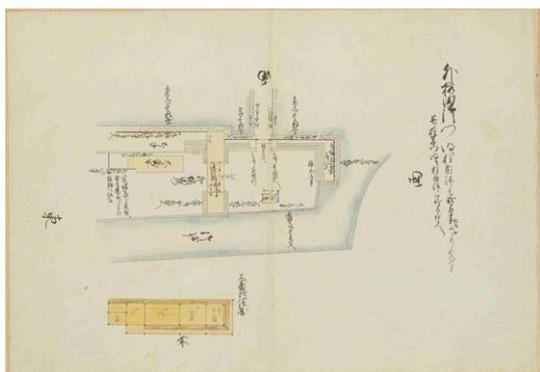
事件現場周辺図です。正に事件が起きた万延元年(1860)に発行(増補改正)されました。中央上部に横倒して「櫻田御門」とあります。事件は、門のほぼ向かいの「松平大隈守」とある松平家上屋敷前の路上で起きました。

「井伊掃部頭」とある井伊家上屋敷から駕籠に乗って出発した大老・井伊直弼は、「櫻田御門」までのわずか 200m の間で、暗殺されたのです。当日は雪が降っており、約 120 人の護衛たちは兩合羽を着て、刀にも柄袋を付けていたため、たった 18 人の襲撃に応戦できず、死者が続出しました。(48.5×52.5cm)

7 江戸城御外郭御門絵図 (3) 外桜田御門

御作事方大棟梁甲良豊前控 享保 2 年(1717) 写 1 帖

東京誌料 6194-2 ★



事件名になっている桜田門の平面図です。江戸城外郭 26 図の全体図と番所の平面図を折本に仕立てたもので、全体が国重要文化財に指定されています。第 3 図が「外桜田御門」で、江戸城の門に多い枡形構えです。枡形は敵の侵入を防ぐために工夫された門の形式で、一の門と二の門の 2 重の門構え、その間は直角に曲がるようになっているものです。外桜田門は震災・戦災を乗り越えて現存しており、国重要文化財に指定されています。(29×40.3cm)

8 〔萬延元年〕櫻田書類 二 蜂屋茂橋著 [天保 12 年(1841)]自序 自筆 1 冊

特別買上文庫 2518-110

田安家家臣で随筆家の蜂屋茂橋が図、絵、記録類を書き写したり貼り込んだりした『権の實筆』の付録です。アメリカの新聞から 1860 年 5 月 12 日の翻訳記事が筆写されています。本文冒頭には「帝國日本の摂政官三月廿四日 大君の城に謁せんとして水戸公子の巨臣一隊の私黨に襲はれ」とあります。アメリカでも、井伊大老の襲撃が報道されていたのです。記事中「三月廿四(24)日」とあるのは、旧暦では「三月三日」で、日付も正確に報道されています。

(25.2×18cm)

9 ^{きんせいめいぎでん ひろおか ねのじろう} 近世明義伝 広岡子之次郎 ^{ありむらじ ざえもん} 有村治左衛門

歌川芳艶画 河村蔵版 2枚

東京誌料 2445-K1-5 (2)、2445-K1-6 (2)



「近世明義伝」は、桜田門外の変に関わった浪士たちを描いた、小型の浮世絵シリーズです。

広岡子之次郎（左）は、桜田門外で井伊大老を襲った18人の大半を占めた水戸浪士の一人です。変では、大老の乗ったカゴを突き破ったと言われています。重傷を負い、自刃しました。(17.9×11.4cm)

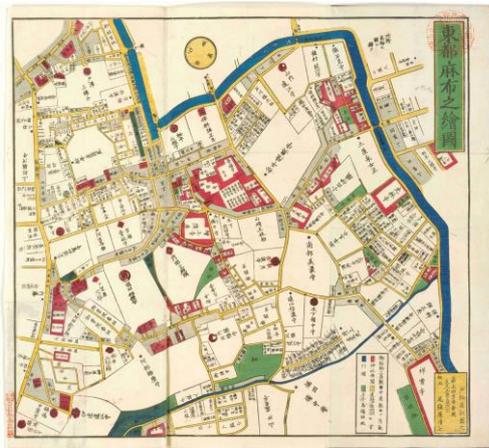
有村治左衛門（右）は、襲撃実行部隊18人のうち唯一の薩摩浪士です。井伊大老の首を掲げたと言われています。襲撃で重傷を負い、自刃しました。(18.5×10.6cm)

●ヒュースケン暗殺

10 ^{とうとあさぶのえず} 東都麻布之絵図

戸松昌訓図 尾張屋清七 嘉永4(1851)/文久元(1861)改正 1枚

東京誌料 0432-3ア

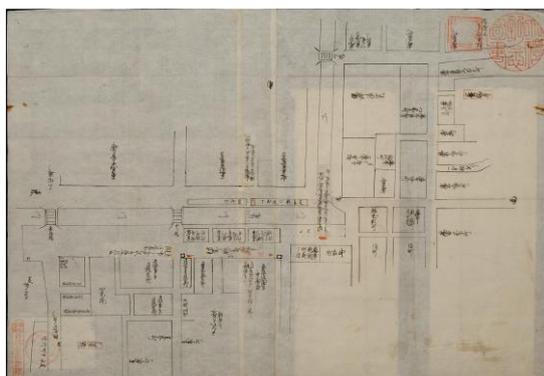


アメリカ公使館通訳のオランダ人、ヘンリー・ヒュースケンが襲撃された現場周辺図です。襲撃地点は、「中ノ橋」北側（※北は図面左側。上部中央左寄りに横倒しで記載）といわれています。図面中央の「善福寺」（地色が赤い所）にあったアメリカ公使館へ帰る途中でした。この頃、攘夷派による外国人襲撃が相次いでおり、アメリカ公使ハリスもヒュースケンに夜間外出しないよう警告していました。実行犯は薩摩藩士とされていますが、公式には判明していません。(48.5×53cm)

11 ^{べいこくこうしかんつうじ} 米国公使館通事ヒュースケン ^{そうなん かんけい ちず および てるまつ} 遭難関係地図及顛末

写 2枚

東京誌料 697-C17



ヒュースケン襲撃現場の詳細な状況が記入された図面です。血痕が路面に赤で描き込まれ、生々しさが迫ってきます。添付の顛末書に「暴徒六七人刀ヲ連ネ、左右ヨリ突進シ来リ、(中略)進ム事百歩餘ニシテ重傷ニ堪ヘズ落馬シテ地上ニ倒レ伏シヌ(中略)此圖ハ其時ノ場所ヲ記シタルモノニシテ、朱点ハ血ノ蹟ナリ。」とあります。左下の赤枠「福富町」の区画に、ヒュースケンが当日訪問したプロイセン公国赤羽接遇所があり、右上の赤枠「善福寺」にアメリカ公使館がありました。(34×48.1cm、24.2×33cm)

図は『米国公使館通事ヒュースケン遭難関係地図』